

学会ニュース

目次

・ 第34回大会について	1
・ 第34回大会共通論題「18世紀と自然災害 —リスボン、ナポリ、日本」趣旨説明 「18世紀と災厄のモーメント——歴史から見る自然災害」 佐藤淳二	2
【エッセー】		
・ 『フィガロの結婚』と18世紀ハプスブルク君主国の「市民社会」	岩崎周一 3
・ フィールド・ワークの勧め	加藤芳子 5
・ 哲学の言語	末松壽 6
・ 事務局より	9

第34回大会について

今年度の第34回大会は、2012年6月23日（土）、24日（日）に名古屋大学で開かれる予定です。開催校責任者は長尾伸一会員です。

共通論題は「18世紀と自然災害 —リスボン、ナポリ、日本」で、コーディネーターは佐藤淳二会員です。24日（日）を充てる予定です。（次ページの趣旨説明をご覧ください。）

詳細は大会プログラムをご覧ください。

多くの会員が大会に参加されることを願います。ご出席は同封の葉書でお知らせください。5月31日（木）までに開催校にご返送ください。

18世紀と災厄のモーメント——歴史から見る自然災害

佐藤淳二（北海道大学）

寺田寅彦『天災と国防』（講談社学術文庫）は、東日本大震災と原発事故後の状況の中、現在まで多くの版を重ねている。寅彦は、1933年の三陸での津波被害について、人間の記憶の残存期間がせいぜい三十年と短いこと、これに対して自然は極めて正確に、非常に長い周期で同じ事を反復すること、結果として被害は深刻化甚大化すると分析している。「紀元前二十世紀にあったことが紀元二十世紀にも全く同じように行われるのである。科学の方則とは畢竟〈自然の記憶の覚え書き〉である。自然ほど伝統に忠実なものはないのである」（寺田寅彦『天災と国防』）。だから、自然科学者としての寺田寅彦の目には、天災を教訓として、その被害を減らす努力を積み重ねることこそ人類の歴史と映るのである。といて、自然を支配し組み伏せようなどという科学観の破綻は、もはや明らかでしかない（原発事故はその最大の象徴である）。つまり、われわれは、2011年3月から始まった未曾有の災害によって、文明の新しいあり方、別の自然観をいよいよ構想しなければならない試練に遭遇しているのである。運命の偶然からもたらされた破局、ないし偶発的緊急事態の到来、それは、確かに災厄ではあるが、また同時に、それまでの自らの力量を乗り越えて運命に立ち向かう契機でもある。新しい理解や行動を迫る挑戦の瞬間（モーメント）、均衡が破れて以前の状態にはもはや戻れない転回点（モーメント）とは、そのようなものではないだろうか。まさに、「ありとあらゆる危険が前途に立ちはだかってくるため、力量によってつぎつぎに乗り越えねばならない」（マキャヴェリ）のが、現時点の特徴であろう。十八世紀においても同様のモーメントが存在していたと考えられる。だから、先人の事例から多くを学ぶべきなのである。本大会の共通論題として、ヴォルテールとルソーの論争という奥行きもある1755年のリスボン大地震について富永茂樹（京都大学）、また、カラブリア大震災と関連してのナポリ啓蒙の考察を奥田敬（甲南大学）、そして東海地方をはじめ各地に甚大な被害を出した1707年の宝永地震と津波という深刻で切実な話題をめぐって磯田道史（静岡県立静岡文化芸術大学）の各氏に、それぞれ考察をお願いした。このシンポジウムが、東西の十八世紀の貴重な教訓を現在と未来に活かす縁となることを願ってやまない。

『フィガロの結婚』と18世紀ハプスブルク君主国の「市民社会」

岩崎 周一（京都産業大学）

このところしばらく、『フィガロの結婚』を中心として、モーツァルトのオペラに関する本を断続的に読んでいます。18世紀後半のハプスブルク君主国の社会と文化を考えるうえでモーツァルトのオペラが示唆するものがきわめて大きいということは、これまで多くの研究者が指摘していたことではあるのだが、これまでは主に17世紀後半から18世紀前半の研究に従事していたこと、そしてこうした事柄に音楽的素養が皆無なまま、ただクラシック音楽が好きで聴いているだけの身で深入りするのはいかがかという思いがあり、これまではさほど深い関心をもたずにきた。

しかし、自分が直接研究の対象とする時期に18世紀後半が入ってきたこと、また『ハプスブルク史研究入門』という本の刊行企画に「近世後期」（さしあたり17世紀後半から18世紀全般）の編者として携わることとなり、18世紀後半についても一応の見通しを持たなければならない必要が出てきたことで、あれこれと勉強するうちにモーツァルトのオペラがもつ社会文化的重要性をあらためて痛感することとなったため、遅まきながら関心を強め出した次第である。それで気がつく、近作だけ採り上げても、水林章『モーツァルト《フィガロの結婚》読解』、松田聡『フィガロの結婚——モーツァルトの演劇的世界』、岡田暁生『恋愛哲学者モーツァルト』、三宅新三『モーツァルトとオペラの政治学』、アニー・バラディ『モーツァルト 魔法のオペラ』といった本が書架に並ぶこととなった。

これらの著作には言うまでもなく啓発されるところが少なくなかったが、一方で松田氏の著書をのぞき、これらの著作でモーツァルトが19世紀に確立したとされる「市民的近代」と関連づけられ、その先駆的体现者として扱われるケースが多いことに対し、つねに微妙な違和感を覚えることにもなった。エッセーを書く機会を与えられたこの場にて、その違和感について少し書き綴ってみることにする。

まずハプスブルク君主国について言えば、18世紀後半に近代市民社会的要素の出現を見出すことは、実はなかなか難しい。フランスとほぼ同等の広大な領土をもちながらも基本的に内陸国で、近世において西欧列強が精力的に展開した非ヨーロッパ世界への進出活動とほぼ無縁であったうえ、貴族などの伝統的支配層が強固に存続していたハプスブルク君主国にあって、都市、およびそこを活動拠点とする（有産）市民の成長は困難であった。近世において全体に停滞的であったとされるドイツ語圏の中であってさえ、ハプスブルク君主国圏の都市の発展は著しく劣ったものであったのである。唯一の例外はウィーンであるが、その発展は17世紀中葉からハプスブルク宮廷の恒久的な御座所（すなわち「居城都市」）とされたことによるのであり、そこでは王侯貴族が旧来の市民層を駆逐し、文字通り中心に座を占めていた。

このような事情により、18世紀を通してハプスブルク君主国の市民層は弱体なままであり、富国強兵をめざす王権は、あの手この手で商人・企業家の育成・後援に尽力せざるを得なかった。しかしそれにも関わらず、彼らの活動規模は相対的に小さかったうえ、活動自体もしばしば長続きせず、その事業は規模を拡大する前に頓挫することが多かった。たとえば晩年のモーツァルトに懇請されてしばしば金銭援助をしたことで知られるヨハン・ミヒャエル・プフベルクは、織物商として財をなし、1793年には貴族に列せられるほどの成功をおさめたが、1801年には破産してその翌年に店を閉ざしている。このような事情から、近世のウィーンにおける商業金融業界の大物は、国外からの移住してきたユダヤ系の人々などからなっていた。たとえばロートシルト（ロスチャイルド）家は、メッテルニヒに近づいて三月前期のハプスブルク君主国の財政に一方ならぬ貢献をなし、彼が48年革命で亡命した際にはその資金を用立てたりもしている。またベートーヴェンの有力なパトロンとして知られるフリース家は、ユダヤ系ではないが、スイス出身のカルヴァン派の一族であった。また、17世紀後半からハプ

スブルク君主国でも緩やかに進行した「プロト工業化」の主たる担い手となったのも有産市民というより、王侯貴族であった。18世紀のハプスブルク君主国で最も成功した事業家は、おそらく皇帝フランツ1世であったろう。

もともと、このような困難を乗り越え、一定の成功をおさめた市民たちもいた。しかし彼らは、楽劇『ばらの騎士』（ホフマンスタール脚本／リヒャルト・シュトラウス作曲）、あるいは喜劇『一階と二階』（ネストロイ）が見事に描き出したように、独自の文化を築くより、概して既存の貴族社会に同化する道を選んだ。先述のフプベルク、ロートシルト、フリースはいずれも貴族に列せられており、ロートシルト家は紋章を決定する際、黒鷲や豹や獅子といった王侯にこそふさわしいとされていた「高貴」な表徴をたっぷりと盛り込んだ図案を提示して、呆れた担当部局に却下されている。またフリース家は、いつか破産したものの、財産整理をおこなって後始末を終えた後は、事業活動から手を引いて裕福な土地貴族として存続していくこととなった。またこうした有産市民のみならず、いわゆる教養市民もまた、行政勤務などを通じ、官界に活発に進出していた貴族とのつながりを強め、実際に貴族にも列せられて、名実ともに「貴族化」していく傾向が強かった。

さらに、19世紀はおろか20世紀も後半になっても、こうした貴族社会を担っていた家門はその多くが存続し、出身地域を基盤として、隠然たる社会的影響力を有し続けた。1873年にウィーンを訪れた岩倉使節団の『米欧回覧実記』（久米邦武編）には、「奥国ノ制度ハ、殊ニ「アリストクラシー」ノ余風ヲ存シ、人民ノ品位ニヨリテ、接遇ノ異ナルコト、我明治以前ノ光景ニ異ナラス」「奥国貴族ノ顕栄ナル、実況ヲ目撃スルヲ得タリ」とある。また1977年に刊行されたオーストリアの富裕層についての著作は、国内資産の39%が人口のわずか0.1%を占めるにすぎない（超）富裕層の手中にあるとしたうえで、その層がハプスブルク家などの旧貴族と新興の事業家の二種により成り立っていると指摘し、前者が先祖伝来の広大な不動産からの収入に基づき、大勢の使用人に囲まれて美しい城館に暮らすという昔ながらの「貴族的」な生活を営んでいるとしている。昨年のオットー・ハプスブルク死去の折には、ハプスブルク家の家長を頭として今なお存続している金羊毛騎士団の一員などとして、こうした人々が葬礼に参加している姿を見ることができた。このような状況を見ると、ハプスブルク君主国には最後まで「貴族社会の黄昏」が訪れることはなかったのではないかと、思われてくる。

しかし一方で、18世紀後半には、後年に市民的道德あるいは価値観とされる心性が、平民層のみならず王侯貴族にも芽生え始めていた。公的には豪華に、私的には簡素にというのはハプスブルク家の伝統であり、オーストリア系ハプスブルク家ではさらに従来から親密さも重視されていたが、マリア・テレジアはこれを一段と推し進めた。プロイセン公使によって「市民的」と評されたその暮らしぶりは、四女マリア・クリスティーネが残した絵画の数々によって今日でも窺い知ることができる。あるフランス人は彼女に謁見した際の感想として、「自分は偉大な君主に拝謁する心持ちでいたが、玉座にいたのは品のいいブルジョワの婦人だった」と述べており、1748年に使節団に同伴してウィーンを訪れ、同様に彼女に拝謁する機会を得たヒュームもまた、形式ばった振る舞いを厭う彼女の闊達な気性について好意的に報告している。また、『日本18世紀学会年報』第26号に掲載された拙稿でも触れたように、貴族も生まれだけでなく、能力が問われることが18世紀には一般化していた。そうした時代風潮のなか、ヨーロッパの知的潮流に深く関心をいだき、国外の文化人と幅広く交流し、「文芸共和国」の一員となっていた者も決して少なくなかった。ここではさしあたり、「国家第一の僕」として禁欲的に職務に精励したヨーゼフ2世、母親と同じかそれ以上に「市民的」に振る舞い、社会契約的君主理念の持ち主であったレーオポルト2世、ベッカーリアを世に送り出したカウニッツ、そしてコンドルセやカントの知己であり、『永遠平和のために』に「かの賢明にして明晰な」として名を挙げられているヨーゼフ・ニコラス・ヴィンディッシュグレースを挙げる程度にとどめておこう。一貫してハプスブルク君主国の担い手であり続けた王侯貴族が18世紀以降、どのように「市民的心性」を受容していったかという問題は、18世紀の枠をはみ出ることとなるだろうが、今後ぜひとも追究し

ていきたい問題である。

エッセーという形式に甘え、かなり雑駁に思いついたことを述べてきたが、このように見てくると、18世紀後半からその消滅に至るまでのハプスブルク君主国の社会は、封建的身分制社会から近代市民社会に変遷していったものとしてみるより、この両者の混淆、さらにはそれらの「調和」(Ausgleich!)としてみたほうが、より実態に即した理解が可能になるように思われる。社会がはらむ問題点や矛盾に鋭い批判の刃を向けつつも、それを深く突き詰めて尖鋭化させることはせず、機知と譲歩によって場を收拾し、ほろ苦さの混じった調和のもとに大団円を迎える『フィガロの結婚』、そしてその他のモーツァルトのウィーン時代のオペラの世界はいま、このようなハプスブルク君主国のありようとどこか呼応するものを、私に感じさせてくれている。

フィールド・ワークの勧め

加藤芳子

英国のロマン派の詩人ジョン・キーツを卒業論文に選んで彼の美の概念を調べ、修士論文では彼の傑作と言われる1連のオードのスタイルを研究する事になった。その過程で、イタリア・ルネッサンス期の代表的な詩人フランチェスコ・ペトラルカのイタリア流ソネットと、それを取り入れたが英語に適応させたウィリアム・シェイクスピアを代表格とするイギリス流ソネットの形式の違いを調べたところ、英国の作家、特に詩人で、イタリアの文化の影響を受けていない者は稀である事に気付く。作家に限らず、音楽家、建築家などもご多聞にもれずそうである。彼らの大半はグランド・トゥアーと称する、長期滞在型の旅行を経験するのが習わしであった。この伝統は貴族階級には必須の体験であり、17世紀の新古典派の時代には最盛期を迎え、18-19世紀には様相を変え、鉄道の発達に伴い、中産階級にまで広がり、貴族階級の特別なものではなくなっていく。

イタリアを訪れたグランド・トゥーアリストの中で、現地で大半の作品を製作した作家の中には、ロマン派の詩人パーシー・ビッシュ・シェリーがいる。彼がどこを訪れて何を見て何を書いたのかを調べるために、20年以上もの長い時間をかけてフィールド・ワークをしてきた。その間、日本ではなかなか入手できなかった資料を求めて、ロンドンの大英図書館やローマの国立図書館に出没しては、現地でしか手に入らない資料を調べて歩いた。ある日ロンドンのテイト・ギャラリー内のショップにあった1冊の本の表紙が目にとまった。男性の正装した姿の背後に描かれている火山の絵が、目に飛び込んできた。この男性は火山と何の関係があるのだろうか？本をパラパラとめくってみると、それは英国では「火山学の祖」と言われている、サー・ウィリアム・ハミルトンという人物と、イタリアのヴェスーヴィオ火山の絵であった。なおも読み進むと、彼は当時の両シチリア王国駐在英国の特命全権公使であり、素人ながらも、当時噴火をしていたヴェスーヴィオ火山に登り、画家にスケッチをさせ、観察記録をロンドンの王立協会に報告していたのである。

そもそもグランド・トゥアーは、古典文学に登場した有名な土地を訪ねて見て歩き、教養を身につけるための、将来宮廷に仕える貴族階級の子弟には、必須の体験であった。代表的な場所は、ヨーロッパの古典の1つである、ウェルギリウスの『アエネーイス』の詩に登場する、イタリアのナポリ湾西部のクーマやアヴェルノ湖あたりであった。クーマにはアポロンの神殿があり、シビラの巫女が仕えており、アヴェルノ湖のほとりから、アエネイスを冥府に連れて行き、父であるトロイの王アンキセスの霊に会わせ、ローマを建国するという自らの運命を確認させるのである。ところが、19世紀

初めになってヴェスーヴィオ火山が再び噴火を始め、ポンペイの遺跡が発掘され始めるに至り、人々の関心は、火山や地質、地層といった博物学に向かい、それまでのグランド・トゥアーとは趣を異にするようになるのである。ナポリ湾の西部の古典に所縁の地域から、ナポリ湾の東部のポンペイやヴェスーヴィオ火山へと、その関心は変わっていくのである。この変化を知りながら、更に、ナポリ湾西部に出来た新しい火山、モンテ・ヌオーヴォにまでも登って観察したのが、詩人シェリーである。

彼はイートン校での教師に博物学の指南を受けて、フランス革命時のカトリックの司祭アベ・オーギュスタン・バリユエルの、「革命は火山の噴火のようなもの」という比喩に魅了されたものとみられる。バリユエル自身は革命に反対する王党派の人間で、彼のジャコビニズムの研究書は、ジャコバン派が、いかにフリー・メイソンの組織作りを倣って組織作りに成功していったかを、克明に調べあげたものである。シェリーは急進思想に被れるが、バリユエルとは逆の立場であるのに、この比喩をその詩の中で使っていくのである

ヴェスーヴィオ火山も、モンテ・ヌオーヴォ火山も、筆者はシェリーやハミルトンに負けじと登ってみたし、クーマの遺跡もアヴェルノ湖もバイアの入り江も、イタリア語を自分で覚えながら、シェリーが手紙に書いているように訪れてみた。フィールド・ワークをしていたからこそ、思わず見つけたのがハミルトンの本なのである。バリユエル、ハミルトン、シェリーと初めて繋がったのである。フィールド・ワークは楽しからずや。外に出ましょう。学問も、文学だけに閉じこもらず、学際的にならないと、見えないものを存在しないかのごとく勘違いしてしまいかねない。危ない、危ない。そもそも18世紀の教養人には、理系、文系などという区別はなかったようである。何せ、国民みんなが博物学に凝り、昆虫や貝殻を夢中になって採集し、標本を作っていた時代なのだから。20—21世紀の殻から抜けて外に出ましょう。フィールド・ワークの勧めでした。

哲学の言語

末松壽（九州大学名誉教授）

「哲学」という名の営みが言語において行われ、ほとんど常に言語で、端的には文字言語で提示される限りにおいて、それどころか哲学とはもしかしたらある種の文字言語の構築に他ならないのではないかと問わせるほどそれらの関連が緊密であることに思いを馳せる時、—今は例えばオクスフォード学派におけるような観察や分析の対象としての言語を語っているのではない—、哲学としての言語活動について考えることは、少なくとも無意味な迷妄—非哲学—ではないと思われる。実際、哲学の言語を、もしくはいわば言語活動としての哲学を一種の危機意識とともに問題として提起した思想家ないし哲学者のテキストもある。筆者の知る二点を挙げる。

Intertextes

1. 我われの時代は、万人にとって接近できしたがって万人にあてられる日常言語 (langage quotidien) と、専門化された諸言語 (langages spécialisés) —哲学者たちの、心理学者たちの、経済学者たちなどのそれで、専門家だけにあてられる—の間の分裂で生きている。対照的に、過去の作家たちを読めばしばしば新鮮な感じをうける。事態は実はそこにある二重の事情のために変形して見えているのである。まず我われは、かつて書かれたものの中で忘却から生きのびた、それゆえ当然我われに最も身近なごく僅かの文献しか読まない。他方それらは我われの歴史に最も多くの影響をあたえたテキストであって、その力たるや当の言語を我われに押し付けるほどのものであったのであり、かつては晦渋な特殊言語であったかも知れないのに、時とともにそれは共通の用語となったのである。

とはいえ読むことによって、それらが我われに直接に関わりがあるとの印象をあたえることに変わりはない。思想は複雑で難解であるかもしれないが、言葉は単純で親しみやすく、我われはそこに自分自身を見出すのである。(Tz. Todorov, *Frêle bonheur : Essai sur Rousseau*, Hachette, « Textes du XX^e siècle », 1985, pp. 7-8)

2. きわめて早くから、母の言語 (langue maternelle) なる表現はフランスで母親に由来する子供時代の言語を意味した。母親は家庭で身体の一部、実用品、日常の時刻などを手続きなしに指示する。それに対して同時に、父の言語 (langue paternelle) は公共の男たち、学者、専門家、戦士、政治家、諸宗教の祭司 (. . .)、すべて支配する決定者たちの言語を示していた。彼らは仲間うちで、諸機関の中で、市のたつ広場で、家での習慣には無縁の言語、一般にラテン語を話していた。市民生活の権力は男性に、若い人々と女性の優しい寛ぎは私人の家庭にあった。(M. Serres, *Éloge de la philosophie en langue française*, Fayard, 1995, pp. 70-71)

こうして思惟をめざす学識豊かな準備のための絶大な忍耐に、言語に対する同じく執拗な仕事ともなう。いかなる文化も恐らくこれほどまでその恩恵を受けたことはない。その結果、フランスでは哲学者たちより上手に書く者はいない。すなわちモンテーニュ、ライプニッツ、パスカル、ボスュエ、フェヌロン、スノー、フォントネル、ルソー、ディドロ、シャルメル＝ラクール. . . など、文体の金銀細工師であり、そこでは精密さは優雅さを、厳密さは魅惑をめざし、これを民は常に学者たちが評価する以上に高く評価する。そのため学者たちは彼らを講壇哲学とは別の域に分類した。素晴らしい逆説である。余りの完成のゆえに害を受けたとは！そこでは美が真理に背かねばならないのか。実はそれを指し示しているというのに。(Ibid., p. 48)

祝辞

水崎博明君は、私にとって大学の同期生であり、それ以来の半世紀をこえる友人であります*。ですから私は、ギリシア語は水崎君と同じように藤沢令夫先生に手ほどきを受けました。そして松永雄二先生の九州大学における最初の数年間のプラトーンについての授業を、水崎君や、そこにいらっしゃる菅豊彦君とともに拝聴することのできた幸せな学生の一人であります。ただし私は、今ご紹介にあずかりましたように、哲学ではなくフランス文学の専攻でした。

真っ先に、水崎君の『プラトーン著作集』第一巻全三分冊の挙公刊に心からお祝いを申し上げます。水崎君、おめでとう！

今日は、水崎君との長い間の即かず離れずの付き合いから、とりわけ若かりし頃の思い出を語ることもできましようが、敢えてこれをやめて、あまり人様に話したことの無いギリシア旅行のことを紹介いたしたいと思います。

それは昭和53年(1978年)、今からざっと33年ほど前の20日間におよぶ旅でした。当時私は西南学院大学の国内研究休暇を利用してフランスに滞在しておりました。まず全体を述べますと、こういうことです。

「7月13日よりフランスの観光団「アテナ」に妻とともに参加して、猛暑のギリシアを旅行する。高校教師を数人ふくむ旅行団はギリシアの古代文化への関心が高く、また行く先々の案内者がギリシア語やギリシア文学・歴史の教師たちであり、名所ではヘロドトスの朗読などの入る説明がなされ、その後討論が続いた。まるでギリシア文化のセミナーであった。コリントの遺跡からはじめて、ミュケーネ、エピダウロス(ここでは円形劇場で『コロノスのオイディプース』の上演を見物)、あの「Et ego in Arcadia」のアルカディア、オリュムピアのかつての五輪競技場、デルフォイ、パルナース山、テルモピル(スパルタの戦士レオニダスらのペルシア大軍との戦闘の跡)などを見物。最後に

ミコノス島にわたる。アテナイ経由で8月2日に帰仏。」（『クレール、人と思ひ出』、宇部フロンティア大学短期大学部、2004年11月、10頁）

旅程としては以上のとおりですが、これに二三の点を追加いたします。

---ギリシアの田舎の方に参りますと、鳩を飼育している鳩小屋というのが見られます。石積みの円筒形で、屋根が円錐となっているちっちゃな素朴な建造物です。日本でもフランスでも見たことのない私は興味ぶかく眺めておりましたが、そのうちにふと思ひ出しました。プラトーンがこれのある対話篇の中で、知識や記憶ないし想起の比喩として用いていたということです。もしかしたら『テアエテトス』においてだったでしょうか。

---プラトーンやアリストテレースで、つまり哲学にとって重要な用語の一つに「eidos」という語があります。希仏辞典ではまず「forme」とか「idée」とか「espèce」などの訳語があてられています。ところでもし貴方がたがこの国のレストランとかカフェにお入りになりますと、この語に出会わないことは多分できません。それは客が消費した飲物なり料理の品目つまり種類という意味でもあって、請求書の上段に印刷されているからです。プラトーン哲学最重要の概念が、日常の何の変哲もない語でもありうるのです。もちろんギリシア語も古典語から現代語へと進化してきてはいます。

さて、二つの事例を取りあげたのですが、ここで話をすこし一般化するために、フランス17世紀のパスカルの言葉を引用いたしましょう。彼はプラトーンやアリストテレースについて次の文章を残しています。「これは、ほかの人々と同じように友達と談笑しあう社交的紳士たち (des gens honnêtes) であった。そして彼らが『法律』とか『政治学』とかを面白がって書いたとき、それは戯れながらであった。(…) 彼らの生活の中で最も哲学的な部分とは単純にそして穏やかに生活することだった。」(Pensées, Br. 331)

その通りであったかどうかは存じませんが、もしこの指摘に触発されて何か付け加えることが許されるとすれば、それは、プラトーンの言語が、先に二つだけ示唆的な例を挙げたに過ぎませんが、おそらくいわば普通の生活にしっかりと根をもつ、日常話されていた言葉で書かれている、ということではないでしょうか。談話の言語による哲学ということです。これは今日では珍しい、異様ですらある振舞いではないでしょうか。私のようなものが、たとえば M・フーコーや J・デリダの書いたルソーに関する文章(1962 / 1967) などを読もうとすると、おそろしく骨が折れるのです。生活の言語とはほとんど全く別のフランス語が展開されているからです。そしてその後またルソーのテキストにもどると、そこにあるのは別種の、つまりスタンダードな言語であります。なにもことさら19世紀以後に西欧で盛んになった諸々の学問、現象学、精神分析、言語学や記号論、また自然諸科学の専門用語の知識なしに読めるのです。で、ホッとすると訳です。同じことは、モンテーニュやパスカルやデイドロについても言えるかもしれません。もちろんそれは必ずしもルソーならルソーの哲学のレベルが低いとか、陳腐であるとか他愛ないとかいうことではないでしょう。

私は、プラトーンこそはこの談話の言語による哲学という(大学においては)稀有な営みを、まず最初にかつ徹底的に実践した第一人者ではなかったかと思うのです。

さて水崎君の文章ないし文体が独特であり、ときには戸惑わせることもあるというのは周知のことです。私の印象では、現代の「西洋」哲学がいわばますます「陥っている」かと思われる難解な言語の操作、言語の改造、造語や借用などへの反発から、他人様はいざ知らず、少なくとも自分は別の言語で、できるだけ基本的な日本語で、すなわち音読みの漢字を羅列するのではなく、(むろん西周の彼方の日本語にさかのぼることは問題にならないにしても)、できることなら大和言葉で哲学を築いてゆこうという意欲、チャレンジ、いや悲願が彼を動かしているのではないか、と思われるのです。そして彼のかかる挑戦はこの翻訳の仕事にも生きているということでしょう。そしてそれは言うまで

もありません。プラトーンその人の言語と行為を模範にしているということです。

水崎君の大いなる事業の門出を祝い、さらに続く長い道のりでの健闘を祈り、私の祝辞といたします。

＊）水崎博明著『プラトーン著作集』（福岡市：権歌書房）、第一巻出版祝賀会（2011年5月14日、福岡大学）での祝辞。なお2012年3月末現在第3巻全8冊までの刊行を見ている。



事務局より

学会サイトの移転について

当学会のサイトは従来、国立情報学研究所の学協会情報サービスを利用していましたが、そのサービス自体が2012年3月末をもって終了したことにともない、当学会のサイトも移転しました。

幹事会を中心に移転先を検討した結果、（株）エデュケーションデザインラボに運営を委託することにいたしました。新しいサイトのアドレスは以下の通りです。

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>

なお、データの入力など、実際の作業については有賀暢迪会員に全面的にご協力いただきました。この場を借りて有賀会員に深くお礼申し上げます。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴェール大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版では Répertoire という項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者 (Pascal Bastien. admin@isecs.org) に連絡してください。

（英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。）

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方は、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、ご自分のお名前とデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部の ISECS-direct ボタンから名簿にアクセスし、英語版で Registration、フランス語版で Inscription というボタンから登録ページにアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会2 に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しません、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限ります。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、9月号は7月半ばまでに、12月号は10月初めまでに、4月号は2月初め頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。

学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・新見肇子・鈴木雅之共編著『揺るぎなき信念 イギリス・ロマン主義論集』彩流社、2012、466 p.

・川津雅江『サッポータちの十八世紀 近代イギリスにおける女性・ジェンダー・セクシュアリティ』
音羽書房鶴見書、2012、322 p.

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、斉藤涉、関谷一彦(年報担当)、武田将明、田邊玲子(年報担当)、寺田元一、長尾伸一(東アジア交流担当)、馬場朗、逸見龍生、堀田誠三、増田真(代表幹事)、

会計監査：玉田敦子 中島ひかる

日本18世紀学会ニュース 第69号 2012年4月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>